

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

草津市教育委員会

中村 大輔

1. 単元名 「近江茶の魅力を伝えよう」

2. 単元の目標

- 郷土に伝わる茶の歴史やくらしとのつながりについて調べたり、近江茶の栽培や製造に関わる方々をインタビューして工夫や思いを調査したりして、近江茶の多様な価値を理解することができる。(知識・技能)
- 持続可能な視点から、近江茶の魅力を知り、郷土の茶文化を継承していくための方法について考えることができる。(思考・判断・表現力等)
- 近江茶の魅力を伝え継承していくために、自分にできることを考え、他者と協働して行動することができる。(学びに向かう力・人間性等)

3. 単元について

(1) 教材観

滋賀県(近江)は、「日本の茶の発祥地」とされ、西暦805年頃、比叡山の開祖である最澄が唐より持ち帰ったお茶の種子を比叡山麓の日吉大社あたりにまかれたのが始まりとされている。滋賀県は、古くから香り高い銘茶の産地として知られている。気候や地形がお茶の産地に適した地域が多く、風味豊かで上品な煎茶が各地で栽培されている。

県内産地の中でも、自然環境を活かした特徴的な茶栽培・製造が行われている「朝宮茶」「土山茶」「政所茶」「日野北山茶」を取り上げる。お茶の栽培方法や淹れ方、健康効果等について調べたり、産地ごとの特徴を理解するために各地の茶農家にインタビューしたりして、近江茶の価値についての理解を深める。また、茶摘み体験や製茶体験、試飲体験などの体験活動を取り入れ、近江茶の魅力を体感できるようにする。郷土の茶文化について学ぶことは、子どもたちの郷土への愛着や誇りを深めることにつながる。

渋川学区において農業を学ぶ理由としては、この地域に県の農業の2大研究施設が置かれていたことや、農業振興のために県下唯一の競馬場があったことなど、昔からこの学区に住む方々は農業を生業とされていて、農業に対する誇りがある。本校では、そのような地域の方々のお思いを大切に引継ぎながら学習を進めてきた。

(2) 児童観

本校は、2003年に草津駅周辺の住宅開発による児童数の増加により、近隣の小学校より分離し開校した。駅周辺は、京阪神のベッドタウンとしてマンションなどの開発が進み、市外・県外からの転入者が多い。転入者が増え、地域のことを知る人の割合が減少しているうえ、現代的な課題として人と人とのつながりの希薄化も影響し、郷土のよさや特徴が伝わりにくくなってきている。子どもたちへ郷土愛の醸成は、

課題となっている。

郷土について学ぶ学習としては、草津市が推進する「スクールESDくさつプロジェクト」の一環として、全学年が地域課題解決型の学習に取り組んでいる。各学年の郷土学習の学びの発表の場として、「渋川ESD（いいまち・しづかわ・だいすき）ミュージアム」を開催し、地域の人々に学びの成果や課題解決のために考えたことを提案として発信している。具体的な実践として、5年生は、滋賀の郷土料理をテーマについて学んでいる（滋賀の郷土料理学習）。6年生は、郷土料理の食材を生み出す滋賀の農林水産業について学んでいる。（滋賀の世界農業遺産学習）

本単元では、これまでの郷土の食文化や地域農業の学びを発展させて、子どもたちが滋賀の茶文化の価値を知ることで、身近な茶と生活とのつながりを意識し、食材を生み出す郷土の環境保全を行うことの必要性を理解することができる。また、茶の魅力を伝え、茶文化の継承のために自分たちができる活動を考え実践していくことで、持続可能な地域社会づくりに向けて行動し、社会に貢献できる子を育てたい。さらに、一連の学びを通して郷土への愛着や誇りを深めることもねらっている。

（3）指導観

子どもたちは、はじめにお茶の魅力を探る活動として、滋賀県茶業会議所に行き、茶摘み体験や、製茶体験、茶の製造工程の見学などをしたあと、茶のおいしい淹れ方を学び、飲み比べ体験をする。茶業会議所の方の講話から、滋賀が日本の茶の発祥の地であることや、さまざまな産地があることを知り、詳しく調べていく計画を立てる。学びを深める過程においては、各茶産地の茶の生産や製造に携わる方々をゲスト講師に招き、その方々の想いを聞く活動を積極的に取り入れる。近江茶に関する多様な体験活動の後には、子どもたちが気づいた近江茶の価値や、ゲスト講師が伝えたかった想い等について、話し合う時間を設定する。個々の気づきを全体で共有する時間を大切にしたい。このような学びを繰り返し、子どもたちが近江茶の価値を理解できるようにする。その後、長く受け継がれてきた郷土の茶栽培や茶文化が、あまり知られていないという地域課題を知り、その解決策をみんなで話し合いながら考え、解決に向けて行動していく。

近江茶の魅力伝える具体的な行動として、「渋川ESDミュージアム」において近江茶コーナーを開設して展示物を作成し紹介する。さらに、実際に茶の試飲ができる交流会を開催したりすることや、他の地域の人々に近江茶の魅力伝えることや、お茶の魅力伝えるための商品開発することなどの活動が考えられる。子どもたちが、話し合いを通して、合意形成しながら、ゲスト講師の方々の想いを受け止め近江茶の魅力伝える具体的な行動に移せるように支援していく。近江茶の魅力伝える様々な活動を通して、持続可能な社会に向けて、他者と協働しながら、実践していくことの大切さに気づけるようにしたい。

4. 単元の評価規準

(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
<p>①近江茶の歴史や品種、製茶方法等について調べ、理解している。</p> <p>②近江茶の産地ごとの特徴を捉えるために、生産者や製造業者へのインタビューを通して、栽培にかける思いや栽培の工夫について聞き取っている。</p> <p>③郷土の茶栽培を継承していくために、茶の価値を伝えることや地域の環境を保全していくことの重要性を理解できたのは、郷土の茶文化の魅力について探究してきたことの成果であると気づいている。</p>	<p>①近江茶の栽培や製造にかかわる話を聞き、長年受け継がれてきた理由や、最近では緑茶を飲む機会が減少しているといった問題を見つけ出し、課題を明らかにしている。</p> <p>②郷土の茶文化の価値を捉え、伝えていくために、手段を選択して多様な方法で収集したり、蓄積したりしている。</p> <p>③課題の解決に必要な情報を取捨選択したり、話し合ったりしながら、解決に向けて考えを深めている。</p> <p>④郷土の茶文化の継承に向けて、お茶を使った商品を考案したり、近江茶の魅力伝える交流会を開催したりしている。</p>	<p>①課題解決に向けた自己の取組を振り返ることを通して、探究的な活動に取り組もうとしている。</p> <p>②郷土の茶栽培の魅力を見つけ、郷土の茶文化を継承するための探究的な活動体験を通して、自分と違う友達の考えを生かしながら、協働して課題解決に取り組もうとしている。</p> <p>③郷土の茶文化の継承のためにみんなでできることに取り組むことを通して、目的を持って、友達と粘り強く取り組み、自己の変化や成長に気づいている。</p>

5. ESDとの関連

(1) 本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

- ・**相互性**：近江茶の価値に気づき、地域の茶文化を継承していくことは、食材を生み出す身近な地域の環境を守ることと関わり合っていることを認識する。
- ・**連携性**：郷土の茶文化が受け継がれにくくなってきているという課題に対して、地域の人々と協力し合いながら課題解決に向けて行動する。
- ・**責任性**：郷土の茶文化を継承するために、自分にできることを考え行動するとともに、将来の地域の環境や暮らし、文化に対してのビジョンをもつ。

(2) 本学習を通じて育てたいESDの資質・能力

【コミュニケーションを行う力】

郷土の茶文化の継承していくための自分の想いや考えを伝えるとともに、他者の考えを尊重し積極的にコミュニケーションを行う。

【他者と協力する態度】

郷土の茶文化を継承していくために他者と協力・協働して課題解決に取り組む。

【進んで参加する態度】

郷土の茶文化を継承していくための様々な取組において、自分の役割を理解し主体的に活動に参加する。

(3) 本学習で変容を促すESDの価値観

【自然環境、生態系の保全を重視する】(生物多様性の重視)

郷土の茶文化を継承していくためには、自然環境の保全や生物多様性は、欠かせないことを理解する。

【人権・文化を尊重する】(文化多様性の尊重)

昔の人々のくらしの知恵から生まれた郷土の茶栽培に関する学習を通して、人や郷土のくらしや文化への価値を深め、郷土への愛着や誇りをもつ。

(4) 達成が期待されるSDGs

目標 15：陸の豊かさを守ろう

目標 17：パートナーシップで目標を達成しよう

6. 単元の指導計画 (全40時間)

次	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1	近江茶と出会う。(3) ・茶業会議所に行き、お茶に関する体験をしたり講話を聞いたりする。 ・近江茶に関するアンケート調査する。	・近江茶の多様性を知るとともに、茶業に関わる人々の知恵が詰まっていることに気づき、詳しく調べてみたいという気持ちを高める。 ・緑茶を飲む機会が減っていることや近江茶の認知度が低いという課題に気づく。	(ア) ① (ウ) ① (イ) ①
2	各産地(土山茶、朝宮茶、政所茶、日野北山茶)の特徴について調べる。(14) ・茶の栽培や製造に関わる方々への聞き取り調査を行う。 ・お茶の試飲体験をする。	・茶業に関わる様々な人との出会い、近江茶に対する思いを聞けるようにする。 ・話を聞いた後、話者が伝えたかった思いについて、共有する話し合いの時間を確保する。 ・地域で茶文化を守ってきた人に教わりながら茶の試飲体験をする。その後、感想を交流し合う時間を確保する。 ・茶文化に係る多様な人から思いを聞く中で、気候や風土に根差し	(イ) ② (ア) ② (イ) ③ (イ) ③ (ア) ③

		<p>た茶栽培を持続可能な形にしていくには、地域の環境保全が重要であることにも気づけるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次の世代に茶文化を伝えていきたいという想いを広げるようにする。 	
3	<p>茶文化の魅力を整理し、継承するための方法を提案する。(2)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近江茶の栽培や茶文化が継承されにくくなっている実態から問題点を見出し、解決に向けた今後の活動について話し合い、見通しをもつ。 	<p>(イ) ③ (ウ) ②</p>
4	<p>継承するための方法を実践する。(21)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「渋川ESDミュージアム」で近江茶紹介コーナーを開設する。 ・地域の方々を招いて、近江茶の飲み比べ交流会を開催し、近江茶の魅力を伝える。 ・近江茶の魅力を伝えるために地元企業と連携して、お茶を活用した商品を開発(お茶パン、お茶ようかん、お茶石けん等)する。開発した商品を発表し、地元商業施設等で販売する。 ・お世話になった茶業に携わる方々に一連の学習活動の成果を報告する。 ・単元のふりかえりをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践したい方法を選び、友達と協力し合って活動する。 ・子どもたちの実践を他学年や保護者に発信する機会をつくる。 ・調べてきた近江茶の価値について地域の人々に発信する機会をつくる。 ・商品開発の計画を立て、行政や企業や市民団体等との連携で、商品づくりを行い、販売する。 ・取組の報告書をまとめ関係者に報告する機会を設定する。関わった方々から感謝される経験をすることで、人のために役立つこと意義を感じられるようにする。 ・これまでの活動を振り返り作文にまとめる。 	<p>(イ) ④ (ウ) ② (ア) ③ (ア) ③ (ウ) ③</p>

7. 成果と課題

(1) 渋川小学校のESD実践について

渋川小学校は、草津駅周辺の住宅開発により児童数が増加したため、2003(平成15)年に開校した。開校以来、学校と地域住民とが協働で管理する「渋川ビオトープ」を核に全学年が積極的に環境学習を行ってきている。2012(平成24)年には、滋賀県のESDの指定校である「しが環境リーディング事業」の指定校となり、ESDカレンダー導入し、総合的な学習の時間を核に教科横断的にESDを推進してきた。また、2013(平成25)年からは、全校のESDに関する学習成果を地域に発表する場として、毎年「しぶかわESD

(いいまち・しぶかわ・だいすき)ミュージアム」を開館してきた。全学年が郷土の自然、くらしや文化をテーマに学習している。特に5年生では、「滋賀の郷土料理学習」と称して、地域の伝わる食について学び、6年生では、「滋賀の世界農業遺産学習」と称して、「琵琶湖システム」という琵琶湖と共生してきた滋賀の農林水産業についての学びを深めている。指導案を作成した取組は、6年生後半に行う山間部の産業である近江茶をテーマとした実践である。

(2) 成果

- ・本学習を通じて育てたい ESD の資質・能力として、【コミュニケーションを行う力】と【他者と協力する態度】を重視していたが、実践の中で成果としての姿が見られた。近江茶に関わる体験活動や茶業に携わる人との出会いの中で、子どもたちは近江茶の魅力に気づき、知名度を高めるための取組を提案して、茶を使った製品開発等を行った。子どもたち同士または、協力してくださる大人と議論し合意形成を図りながら、商品開発ができた。支援するなかで大切にしてきたことは、子どもたち同士の交流の場を積極的にもつことだった。体験学習やゲストスピーカーの話の後には、新たに知ったことや考えたことを交流し合った。そうすることで個々の気づきを全体に共有することができた。また、地域の課題を自分事としてみんなが受け止め、何とかしたいと行動に移すことができた。
- ・本学習で変容を促す ESD の価値観として、【自然環境、生態系の保全を重視する】と【人権・文化を尊重する】を重視していた。茶の製造については、各産地がそれぞれの気候や風土、土質などの地理的特徴を活かして、持続可能な生産を行ってきていることや環境保全の取り組みを知ること、自然と共生することの大切さを改めて考えることができた。また、普段何気なく飲んでいる茶が、茶栽培や製茶に関わる多くの人々の工夫と知恵で支えられてきていることや、茶は和の文化の基礎になっていることを知ることができたことは、地域の文化を尊重する態度に繋がったと思われる。行動変容としては、普段何気なくスーパーなどで購入していた茶葉だったが、学習後は、商品の箱の裏の産地や製法の記載を確認するようになった子が多くいた。

(3) 課題

- ・子どもたちの主体性を重視した実践にするには、教師同士や地域コーディネーターとの綿密な連携が不可欠である。関わる教師が共通理解し共通実践するための時間の確保は難しい。
- ・課題解決に向けての提案・行動まで行うには、総合的な学習の時間だけでは時数に限りがあり、既定の時間数を超えてしまうことがある。他教科との連携を計画的に行っていく必要がある。
- ・商品開発は学校だけではできないので、企業などと連携で行う必要がある。協力いただける企業をみつけ交渉していくことに難しさがあった。



現在の学年終了時に目指す姿

郷土に伝わる近江茶の多様な価値を理解し、茶文化を継承していくために自分にできることを考え、他者と協働して近江茶の魅力を伝える行動をすることができる。

毎日飲んでいるお茶について考えたことがなかった。
滋賀県に茶畑があるなんて知らなかった。

校外学習「滋賀県茶業会議所に行こう」
児童は、講師の講話から、滋賀県は茶栽培が始まった場所であり、様々な茶産地があることを知る。茶業会議所では、茶摘み・製茶・茶工場見学など行い、近江茶の栽培や製造に興味を持たせる。

国語科「聞いて考えを深めよう」
相手の思いや考えをくわしく引き出すインタビューの仕方を身に付ける。また、聞いたことをもとに自分の考えを深められるようにする。自分とは、立場や年齢の異なる人から話を聞くことよき気づく。

総合的な学習の時間「近江茶について知ろう」
県内の主要な産地の方々へのインタビューを通して、茶の栽培や製茶方法の違いや、茶文化を継承しようとする願いに気づくようにする。産地ごとの特徴や茶の効能を詳しく調べたり、実際に茶を淹れて、飲み比べたりして、お茶の魅力について気づかせる。後継者の問題や、産地間の競争、緑茶離れなど茶栽培に関わる課題と出合わせ、その解決策について考えるようにする。

道徳「緑の闘士-ワンガリ・マータイ-」
身近な環境（文化）を守るためには、一人ひとりにとってどのような心構えが大切なのかを考える。環境保護に取り組んだマータイさんの生き方や行動力に学ぶ。

総合的な学習の時間「近江茶の魅力を伝えよう」
○主に養いたいESDの資質・能力
コミュニケーションを行う力
郷土の茶文化の継承していくための自分の思いや考えを伝えるとともに、他者の考えを尊重し積極的にコミュニケーションを行う。
進んで参加する態度
郷土の茶文化を継承していくための様々な取組において、自分の役割を理解し主体的に活動に参加する。
○主に育てたいESDの価値観
人権・文化を尊重する（文化多様性の尊重）
昔の人々のくらしの知恵から生まれた郷土の茶栽培に関する学習を通して、人や郷土のくらしや文化への価値を深め、郷土への愛着や誇りをもつ。

図画工作科「メッセージを伝えたい」
言葉だけでは伝えられない、伝わりにくいことを形や色で表現する場面として、近江茶の魅力を伝えるポスターや茶ようかんのパッケージをデザインする。

「自然の偉大さ」を知り、『大切にしよう』という思いが高まった。



人と人が協力し合って、課題解決に向けて行動していることを知った。

修学旅行
「三重県の世界農業遺産と出会う旅」
農業遺産に登録されている「尾鷲ヒノキ林業」と「鳥羽・志摩の海女漁業と真珠養殖業」に携わる方々との交流や意見交換を通して、郷土の文化を支える農業生産の重要性に気づくようにする。また、持続可能な農業としていくための人々の工夫に気づき、自分たちの活動のヒントを得る。

家庭科「共に生きる地域での生活」
地域の人たちとのかかわりを通して、地域の一員として自分にできることを考える。近江茶の魅力を発信するために、地域の人々と協働して「茶ようかん」を作る計画を立てる。

総合的な学習の時間「茶ようかん作り」
和菓子職人の協力を得て、産地ごとの茶ようかんのレシピを作成する。茶ようかんにどのような思いを込めるのか話し合い、製造して販売することの価値について考える。できた茶ようかんを地元のお店で販売する。

社会科「未来につなげる」
一連の近江茶学習を振り返り、持続可能な社会を創っていくために何が大切か、自分には何ができるのかを考える。考えたことを元に多様な世代の方と交流する。